

# ルイス・キャロルの日記

—— 第 2 卷 1856年 ——

笠 井 勝 子

ルイス・キャロルの日記第2巻は1856年1月1日から12月31日を収めている。従来作品を通してイメージされたキャロル像というものがあるとすれば、また別に、日記を通してキャロルをみるのもよいであろう。日記の元は大英図書館に所蔵され、13巻あったうち現在は9巻が残っている。表紙にはそれぞれ *Private Journal* として、何年何月何巻、とキャロルの手で書いてある。

キャロルの日記が最初に出版されたのは、ロジャ・ランスリン・グリーン編纂で1953年であるから、それから43年が経過した。グリーン版は、全体に削除を施して2巻で出た。編者は実際の日記を隅から隅まで目を通したと序文に書いているが、参照したテキストはキャロルの姪たちがタイプアウトして渡したものだ。そのせいか、削除の仕方には、コンテキストを無視した部分がある。詳細な註はモートン・コーエンが編纂したルイス・キャロルの手紙集の註と同様に、きわめて豊富で役立つものであった。但し、長い註が本文の中に割り込み、テキストの理解の妨げになっている。このようなグリーン編の日記が出版40年を迎えた時に、新しく、ルイス・キャロルの日記全体の出版がはじまった。既刊の第一巻は1993年、第2巻は94年、そして第3巻は95年末に出た。

今回の編集上の特徴は、大英図書館に現存する9巻の日記を、削除せず、すべて収録することにある。キャロルの日記原本は、縦7.25×横4.5インチ、やや大判の手帳の大きさで、罫線はない。表紙裏に購入したオクスフォードの文具屋のシールがそのまま付いていた。

通常の記録は右側の頁に書き、後からの書き込み、補足を左頁に記入している。この部分については、グリーンはまったく本文と区別していないのに対して、今回の編集者エドワード・ウエイクリングは、左頁にある書き込みや補足をすべて角括弧で括って、本文とは区別して示した。さらに註は、脚注方式を採用して本文をすっきりと読みやすく改めた。先輩のグリーンを参考にしながら、日記に出てくるいろいろな事項、特に人物についての解説が詳しい。

ここでは先ず、ロジャ・ランスリン・グリーンの編纂で40年間読まれ、言及され、引用されてきた2巻の *Diaries of Lewis Carroll* が9巻ある日記の中から何を省いていたか、その省略のために、読む側に事実とは異なる印象をあたえたことはないか、という問題を考えてみたい。次の例は、ウエイクリング版からの6月5日の引用で、グリーン版に出ていない箇所については枠の中に示す。

Met an old school friend whom I have not seen for 10 years, Mounsey, who was at Richmond with me. He came to my rooms to find me, but neither of us in the least recognised one another: we went together to his lodgings to see his sister, who is staying in Oxford with him, and I afterwards spent the evening with them, when we settled plans for lionising tomorrow.

In the interval, from half past four to seven, Frank and I made a boating excursion with Harry and Ina: the latter, much to my surprise, having got permission from the Dean to come. We went down to the island, and made a kind of picnic there, taking biscuits with us, and buying gingerbeer and lemonade there. Harry as before rowed stroke most of

the way, and fortunately, considering the wild spirits of the children, we got home without accident, having attracted by our remarkable crew a good deal of attention from almost every one we met. Mark this day, Annalist, not only with a white stone, but as altogether *dies mirabilis*. (In the morning

I was introduced to Sir Edmund Lyons, by Ogilvie, who brought him to the Library).

この日、キャロルはリデル学寮長の子供ハリーとロリーナを連れてボートで出かけた。日記の中で、彼は特別によい日のことを、ローマ人のしきたりを真似して、「白い石」で記しをつける。6月5日は「白い石」のみならず‘*dies mirabilis*’、奇蹟のような素晴らしい日だ、と書いている。しかし、引用に見る枠の部分を省略したためにグリーン版の日記では、いきなり‘From half past four to seven’（4時半から7時まで）の書き出しになる。ウエイクリング編集の日記では、午前中は図書館に行き、午後には、リッチモンド時代の珍しい友人が部屋へ訪ねてきて、お互いにすぐには相手がわからない程になっていた、ということ、そして、このマウンジーという友人の宿泊先に一緒に行き、オクスフォード見物にきている彼の妹に会う。また、夕食後の時間をその兄妹と一緒に過ごす、次の日に見学する予定を話合う。グリーン版で冒頭に出ているハリーとロリーナをつれて従兄弟のフランクとボートを漕ぐ話は、この後に続く部分であり、その書き出しは、In the interval... 「その合間に..」で始まっているのだが、グリーン版の日記では、前後を削除したために、この書き出し部分も省略した。即ち、「その合間の出来ごと」だけがグリーン版には載っているのである。

この日の締めくくりには、朝、オジルヴィーが図書館に連れてきたエドモンド・ライアンズ卿に紹介された、とあり、ここはキャロル自身が

丸括弧で括っている。最後になって思い出したのであろう。

このように他にも幾つか出来事の記録がある中でグリーン版では、この場合について言えば、子どもたちに関する部分だけで、他の記載はみな削除した。そのために、キャロルのこの日一日はリデルの子供のことで終わったか、という印象を与えても不思議はない。元の日記では、次の6日はマウンジーと妹が昼食に来たこと、それから図書館へ案内したこと、7日には、マウンジーとその妹と一緒に午後のお茶を取ったと出ているが、その部分もすべてグリーン版では削除されている。

もう一つ別の例を、4月25日から引用すると、

Went over with Southey in the afternoon to the Deanery, to try and take a photograph of the Cathedral: both attempts proved failures. The three little girls were in the garden most of the time, and we became excellent friends: we tried to group them in the foreground of the picture, but they were not patient sitters. I mark this day with a white stone.

Went to Scoltock in the evening to tea and Euclid: he offers to coach me in History in return, and I seriously am thinking of closing with it, and attacking my old enemy, Hume's *England*, again.

この日はサジーの写真機で大聖堂の写真を撮りに学寮長館の庭へ行き初めてアリス・リデルと出会ったことを記す、有名な箇所である。もうすぐ4歳になる幼いアリスとロリーナ、イーデイスと友達になる、もう一つの「白い石」の日である。(この年、キャロルの日記には「白い石の日」が3回あった。)

同じ日の夜、キャロルはクライスト・チャーチのチューターをしてい

る10歳年上のスコルトックのところへお茶とユークリッドに出かけた。これはユークリッドをスコルトックに説明するためであった。そのかわりにスコルトックの方から歴史の勉強を指導してやろう、と言われ、キャロルは I seriously am thinking of closing with it, and attacking my old enemy, Hume's *England*, again. 数学と歴史を教え合っておあいこにし、仇敵ヒュームの英国史を攻略するか、と書いている。余程歴史が苦手だったようだ。(前年の3月13日には全般的な勉強計画をたてているが、それは計画倒れして、ほぼ1年後の2月5日に計画の見直しを行なった。その際に、歴史については「時代毎に全体をマスターしようとするのは諦めて、テーマを絞り、例えば宗教改革について、徹底しよう。それがこの勉強の基本だ」と書いた。)

スコルトックと歴史に関する部分もグリーン版は削除して、4月25日の記録はサジーと写真を撮りに出て3人のこどもと出会った、素晴らしい日であった、という記述だけになっている。

たしかにキャロルはこどもたちが大好きであった。こどもたちも彼を大好きになった。しかし、グリーン版の日記の中にみるこのような省略は、キャロルにとって他の日常のことはまるで眼中にないような印象を与える。それがキャロルをマニアック、偏執狂としてこれまで印象付けることになっていたのではないか。そうだとすれば、削除せず全体を収めた日記が出ることによって、より大きい視野の中でルイス・キャロルを見るようになることが期待できる。

上の二例では、前後に省略されたできごとがあるのをみた。また記述の部分的省略によって、グリーン版は文の意味に読み違いをさせることがある。8月18日に次のような例がある。ここでは‘we’が、省略のために、二人と読める。実際は、グレート・ケーブルに登頂して、麓へ下りるまで一行は5人だった。

Collyns and I started on our walking tour :

Mr. Webster, with Skeffington and a pupil of the name of Benn, accompanied us most of the day.

We began by rowing down to Lowdore ; then, without stopping to look at the falls there, which are nearly empty, we walked down Borrowdale, and lunched at Seathwaite, where it is said more rain falls in the year than in any other place in England. The whole party ascended Great Gable, but we got no view, as it was entirely wrapped up in mists. At the foot the party divided, and Collyns and I walked on to Wasthead, where we got beds at a cottage.

第2巻の日記の年1856年、ルイス・キャロルは24歳である。テニソンの詩をパロディにした『三つの声』やワーズワースの『決意と自立』のパロディで白の騎士の元歌になった『寂しき沼辺で』をトレインに発表する年。また、ヴィクトリア朝指折りのポートレート写真家<sup>1)</sup>といわれるようになる、その出発の年すなわちカメラを手に入れた年であり、『不思議の国のアリス』を書くきっかけを作ったアリス・リデルとの出会いの年。クライスト・チャーチで大学教師として初めて講義をしたのはこの年の1月である。

1856年のキャロルは1年のほぼ半分をクライスト・チャーチで過ごした。即ち1月19日から3月14日までの2か月間(Hilary Term)、4月5日から6月7日までの2か月間(Easter and Act Term)、そして10月10日から12月12日までの2か月間(Michaelmas Term)の合わせて6ヶ月である。

1856年のルイス・キャロルの動静をその居所で追ってみる。

- 1月15日 リボンからロンドンへ。  
着いた夜、プロンプトンのおヒスケフィンソンを訪ねる。
- 19日 おヒスケフィンソンの元に寄って後、クライスト・チャーチへ。
- 3月14日 オクスフォードからバトニーのおヒハッサード・ドジソンの所へ。  
リッチモンド、ロンドンへ出かける。
- 20日 リボンへ。(マッカーショーへ遠足)
- 4月1日 クロフトへ。
- 5日 オクスフォードへ。
- 6月7日 パットニーへ。(ロンドンへ)
- 20日 クロフトへ。(9マイル離れたリッチモンドへ)
- 7月7日 (ウイットバーンへ)
- 12日 クロフトへ戻る。
- 8月12日 ポーティンスケイルへ(父親の友人ウエプスターの所へ。ケジックで友人  
コリンズと待ち合わせる)
- 18日 コリンズと徒歩の旅に出発、グレイト・ケーブルに登る。
- 21日 ポーティンスケイルへ戻る。グレイト・ケーブル山頂で寒風に当たった  
せいで顔が腫れて痛む。
- 27日 顔の痛みのせいで予定より1日遅れてアンブルサイドへ。(大叔父ヘンリ・  
トマス・ラトウィッジを訪ねる)
- 30日 バーナード城へ40マイルの距離を定期便の馬車で立ち寄る。途中ボウズ  
に降りる。  
クロフトへ。
- 31日 コリンズを案内して、ステイプルトンとイリーホーム・バンクスへ。
- 9月1日 コリンズを案内してリッチモンドへ。
- 16日 ウイットバーンへ、妹のメアリとルイーザを連れて。
- 22日 クロフトへ戻る。ウイットビーへ。
- 10月4日 クロフトへ。
- 8日 オルバストンの大叔母の所へ。
- 10日 弟たち二人が合流し、3人でクライスト・チャーチへ。
- 12月12日 8日に始まった学期末の試験が終わる。  
ロンドンへ。  
エグゼター・ホールへ。メサイアを聴く。
- 13日 アデルフィ劇場へ。
- 15日 オリンピック劇場へ。
- 16日 プリンセス劇場へ。(『夏の夜の夢』)

- 17日 オクスフォードへ。  
18日 学寮長館へ。(長男ハリーにクリスマスの贈り物を届ける)  
(22日 学寮長は夫人と主治医アクランドに伴われてマテイラへ)  
24日 クロフトへ。

キャロルの日記の記録によるとリポンからロンドンへの列車は8:58発、21:30着とあり、当時リポンとロンドン間は12時間30分かかっている。また、オクスフォードからクロフトへは、8:15発、クロフト20:00着で、こちらは11時間45分かかった。乗り継ぎの待ち合わせ時間も大きいであろう、当時の列車の旅は長かった。

前年の秋に数学を教える任命を受けるが、実際に講義を始めたのは、1月の休み明けである。日記からは、教えていたのは数学専攻ではなく、音楽や法律、神学といった方面の学生で、一般教養として必修になっている数学をみていたことがわかる。したがってやる気のない学生を、(学士号のための)最初の試験に合格するために面倒をみているわけで、楽ではなかった。「冬休み中に教官のロイドが出しておいた課題について、学生のグレゴリーを試験した。全く何もご存じない。ロイドは結果を学寮長に報告」と書いている。1月25日には、学生時代の自分の指導教官、バーソロミュー・プライスを訪ね、学生に与える課題の順序を相談している。60名の学生を抱えて、呼び出ししてもなかなかやっこない、この日の呼び出しに応じない者がまだ8名いる。26日には、今学期最初の三角法の講義をした。28日には、今学期最初のユークリッドと算数の講義で、12名出席のところ2つのクラスにそれぞれ9名と11名しかでっこない。1月22日にはおじのスケフィンソンに写真器材を見つけて欲しい、と手紙を出しているが、それも、読んだり書いたり他にやることを欲しいと書いて、毎日こんな調子ではかなわない、と考えた様子がかうかが



える。

やがて夏休みの後になると、個々の学生の個人指導に時間を取られ、しかもできない学生のために時間を取られて、できる学生のことがおそろかになってしまう、と心配する。あるいは、教えるためにどういう勉強が必要であるか、教師としての勉強をやらないといけな、夏休みに遊んでしまって、いまから反省しても追い付かないけれど、次の長い休暇はプライスが行くところへ出かけて勉強の指導を受けよう、などと教えることについて真剣に悩んでいる様子が日記にみえる。

当時の学生は、紳士として期待されていた反面、一方ではそれらしくないところもあった。学生を指して、ふつう漠然と‘man’、‘men’といい、個々には姓で呼んでいた。クライスト・チャーチのホールで食事の折りに、あるときはあまり騒々しいため、学生監のゴードンが何人かをホールから追い出した。「食事はお祈りが始まる前から食べ始める、終わると周囲の人を待たず、先に席を立ってしまう。ナイフやフォークで大きな音を立てる。回ってくるお皿の肉は勝手に沢山切り取ってしまう」<sup>2)</sup>。なかには夜中に、空き部屋に入り込んでそこから中庭へ花火を投げつけて爆発させたり、近くの部屋に窓から瓶を投げ込んだり、というなかなか過激ないたずらをする者まであった。大学の創立記念の時には、お祝いのイルミネーションが見事であった。ところが、学生たちが屋上から投下するローマ花火で、クイーンズの教官が失明しかける事件がおきた。日記には‘one eye blinded, and it is feared that he may lose the other also.’と心配する。この人、ジェクス=ブレイクは後に神学で博士号を取り、ラグビー校の校長にもなっているので、失明は免れたようだ。それにしても、クライスト・チャーチでは昔から学寮長が許可をして、屋上から花火の投下をやっている、と問題を指摘する。

大学の中で、キャロルは決して付き合いの悪い青年ではなかった。だれそれと朝の食事をした、昼食をした、デイナーをした、という記述が所々に見える。ある時（5月1日）は、マーシャル、ロイド、プラウト、ティリット、ペインといった先輩、同僚を自室に招き、12人で朝の食卓を囲んでいる。この前年の1855年には、クライスト・チャーチのグレイト・ホールで食事をする全員約40人にそれぞれ大壇の葡萄酒をふるまったこともあった。

こうしたことはキャロルが飲んだり、食べたりすることに興味があったというよりも、当時の社会習慣に従ったことと思われる。朝の食事で人に会うということは、大学に住んでいるからできるのか、或いは当時特定の階級の人々がおこなっていたことなのか、とにかく 'breakfasted with'、'dined with' といって、呼んだり、呼ばれたり、時には朝からやっている。勿論相手は同じオクスフォードの大学の仲間、あるいは叔父のスケフィントンのところ、と限られていたが。

休暇にはどうしていたかといえば、父親ときょうだいのいるクロフトの牧師館がキャロルにとっては家族の住む故郷である。しかしそこへ帰るよりは、先ブロンドンへ行き、パットニーに住む父方のおじハッサード・ドジスのところによく立ちよっている。

ハッサードは民事訴訟裁判所主事をしており、その長男で従兄弟のフランクことフランシス・ヒューム・ドジスとは2歳違いで、1855年、56年のキャロルの日記には彼の名前が時折出てくる。一方、ブロンプトンには、母方のおじ、スケフィントン・ラトウイッジ が住んでおり、キャロルはここを訪れるのが楽しみだったらしく、「またこんなに間を置かず直ぐにブロンプトンへ行ってしまった」というような、反省めいたことが書いてある。

おじスケフィントンは、進取の気に富んだ人らしく、新式の道具、器具、

珍しいものを手に入れ楽しんでいた。それが、若い甥にとって大変な魅力であり刺激になっていたようだ。

スケフィントン・ラトウィッジは独身で精神病院の査察官をしており、患者の待遇、病院の状態を査察するために巡回し、キャロルが行くと仕事の旅行で不在のことが時折あった。一方では、おじのハッサードやクロフトの知り合いの所をたずねると、たくさんの子どもたちをはじめ、みんな相変わらずでいつ行ってもあまり変わらない、ということが日記に出てくる。キャロル自身は、大学の中に身を置いて、日常の些事に煩わされず、先輩、同僚に恵まれ、広がる未来を前にしてこれからという時であるから、独身のスケフィントンおじの姿は、若き甥の目に格好よく映ったのにちがいない。3月5日の日記には、‘Skeffington leaves Brompton today for a professional tour, so that I miss seeing him’ 「スケフィントン叔父は今日から仕事で旅行。会えなくて残念」と書いている。キャロルが会えないのが残念、という表現を使っているのは珍しい。彼は、「結婚は当分考えないし、したがって今から保険に入る必要もない」と言って、自立の見込みがついた時に、将来のために保険に入るようにという父親の忠告を素直にきかなかったのも、或いはこの叔父の生き方への共感があったせいかもしれない。

しかし、その一方で、ロンドンで気がねなく立ち寄れたのは、ハッサード・ドジスのところで、ハッサードには演奏会の切符の手配を前もって頼んだりする。ハッサードの長男で従兄弟のフランクとは、ロンドンでもオクスフォードでも、よく一緒に出かけた。春休みの3月16日の日曜日には、朝の礼拝の後で、フランクと一緒にロンドンの町へ出て、雑誌『トレイン』の編集をしているイエイツの家を訪ねた。その帰りに、‘We went to see the remains of Covent Garden Theatre on our way back,’ とある。これは、3月5日の未明にコヴェント・ガーデン劇場が火災で焼け落ちて、その焼け跡を見にいった、ということである。しか

し、「警察でバリケードを作って近寄れないようにしている。タイムズの記事では何一つ残らず焼け落ちたように書いていたが、正面と建物の外側だけは残っているようだ」と、新聞が書いていたのと見たのとでは違う、と書く。日記の本文は、特に劇場の火災ということには触れていないが、注釈をみるといつ、どんな状況で出火したか、またタイムズの新聞記事からの抜粋が載っている。

キャロルの劇場通いは、休みになるとロンドンへ出てひととおり見る熱心さで、良いものを選んで見ていたであろうが、これでは聖職者は無理かと思われる。1月の休みが明ける前には、クロフトからオクスフォードへ戻る前に、ロンドンへ出て、アデルフィ、オリムピック、プリンセス、ヘイマーケット、各劇場へ行き、プリンセス劇場では『ハムレット』をはじめ丸5時間芝居を見て、翌日はヘイマーケットへ行った。

12月は学期末試験が終わったその日にロンドンへ出ると、エグゼター・ホールでメサイアを聞き、再びアデルフィ、オリムピック、プリンセス、各劇場へ足を運ぶ。プリンセス劇場では、真冬に『真夏の夜の夢』を見る。

芝居について新しいウエイクリング版の日記に出ていることから2つ挙げて見たい。一つは19世紀初頭の俳優でコメディアン、チャールズ・マシューズがその「回想録」の中で<sup>3)</sup>、「ヘンリー八世の中のピショップ・ガードナー役は一座の中で一番うまいコメディアンがやることになっている」と書いているのを読んで「昨年この芝居を見たときにはそのしきたりを知らなかったので、メドーズがやったのを見てずいぶんびっくりした」と、記す。これはグリーン版にはない（1月5日）。

他の一つは、2月2日の後書きに‘Mrs. Charles Kean was a Miss Ellen Tree.’と書いた部分。これは、「前の年にヘンリー八世の舞台でお妃キャサリン役が素晴しかった、あの女優、チャールズ・キーン夫人は、昔の

エレン・トゥリーだとわかった」といっているのだが、グリーン版ではこの部分が削除してある。そのために、エレン・テリーと読み違いをされているが、この人はエレン・テリーとは年齢も全く違う別人である。チャールズ・キーン夫妻は当時流行の舞台監督であり、俳優、女優であった。後に舞台女優として有名になるエレン・テリーは、その頃はまだ子役で、キーン夫妻は彼女にとっていわば舞台の上の育ての親ということが、『エレン・テリーの自叙伝』に詳しい。

夏休みに入り、ロンドンの劇場廻りの後にやっとたどりついたクロフトでは、人を訪ねて出かけたり、写真を撮りにいったり、親戚に会いにいったり、ウイトバーンへ泊まりがけで出かけたり、やっと7月24日になって、「1、2時間勉強を始めた」とある。しかし、8月12日になると、湖水地方の知人の所へでかけて、ケジックで、クライスト・チャーチの友人コリンズと待ち合わせし、一緒に徒歩旅行をする。帰ってくるのは8月の終わり。それからクライスト・チャーチへ戻るまでにも、ウイトバーンに1週間、ウイトビーへ2週間とまさに飛び歩いている。こうして10月10日にクライスト・チャーチへ戻って後、休暇中に勉強しなかったことを、しまったあ、しまったあ、とさんざん後悔する。

ところで、ルイス・キャロルはことば遊びの人だが、彼の日記は事実の記録で、簡潔そのもの、ノンセンスやユーモアは陰も形もみえない。ただわずかにこの湖水地方を歩いた時に、地元の人から教えられた道を取り間違えて、「We managed to miss the path.」と、かすかな苦笑いをのぞかせる。

キャロルは音楽好きであった。日記で見ると、ヴォーカルが好きだったようだ。生まれた土地チェシャー州ダズバリのオールセインツ・パリス教会には、生誕100年を記念するステンドグラスがあり、中央にキリスト降誕の場面が描かれて、そのすぐ上には楽器を抱えた8人のミ

ューズの姿がある。教会の説明では、キャロルは詩も書いたので、詩の女神が、彼の好きな音楽の楽器を携えているそうで、ミューズが9人に1人足りないのは、キャロル自身が入ることになるのだ、という。

キャロルは音楽会に行くと、必ずその演奏家の名前、印象、曲名、感想を日記に書いた。サマセットという同僚が癲癇の発作を起こした時に通りかかり手助けできた、という3月1日の記載は、グリーン版ではそれだけだが、実際はさらに他の事柄もあった。それは学寮長館で1週間後に行なわれる音楽の夕べの招待を受けたこと、また夜はミットフォード・ハーモニック・パーティに出かけて歌を聞いたことだった。5日には、エグゼター・カレッジのマンクが音楽で докторの学位を取るために開いた演奏会に行き、これこれのアリアが一番よかった、と感想を付している。10日は、復活祭の休暇にメサイアを聞くために、おじのハッサードに切符の手配を頼み、3月18日は、これはまた、キャロルにとって1つの記念となる日、つまりサジーといっしょにオタウエルというメーカーでカメラ、レンズその他約15ポンドの品を注文をした日であるが、その夜、エグゼター・ホールへ行きメサイアを聞いて、ソプラノのジェニー・リンドについて次のようなことを書いている。「思ったよりずいぶん年をとった顔をしていた。歌いだすまでのじっと動かない表情は真剣そのもの。一度歌い出だすとたいへん美しいきれいな笑顔になる。まるで素晴らしい音楽に我を忘れた子どものように、喜々としている。美しい静かな声は、夢の中で聞いている歌声かとおもわれた」と。こうして、あの歌が良かった、この歌が良かったと、ソリストとアリアの題名を上げていく。また、この日のコントラルトを歌った、ドルビーという歌手の歌う‘He shall feed his flock’（「主はご自分の羊を養われる」）というアリアについて、非常によい、と書いている。このシャーロット・ドルビーという人は、メンデルスゾーンが彼女のために『エリア』というオラトリオを書いたといわれる程の名コントラルトであった。

キャロルのメサイアに関する記述をみると、おそらく彼はこの曲を全部覚えていたのだろう、と思われる。とにかく彼は大満足で、この日の日記の最後には、‘This day I mark with a white stone’と記した。1856年に3回ある特別に良いことのあった「白い石」の日、その中の一つがこのメサイアを聞いた日である。

キャロルの描いた絵はかなりの表現力をもっている、とも言われる。大英図書館にあるキャロル手書きの「地下の国のアリス」の挿絵をみると、アリスの腕を描いた線には、非常に優美で完璧と思える線がある一方、動物の絵には少しもてあまし気味のところがある。絵と彫刻は好きで、時には同じ展覧会に足を運ぶこともあった。

4月24日の日記では、グリーン版には出ていないが、キャロルは同僚のテイリットからスケッチを2枚借りて模写をしようとする。1枚はターナーの絵である。ところが、1か月後の5月1日に仕上げたものを持って行って見せると、やり方がだめだ、と言われる。‘the proper way is to copy every single line’ 正しくは、線の1本1本をそのまま写すことだ、と言われ、そこには特に下線を入れて強調している。はたして彼が試してみたかどうか。

キャロルは詩を投稿するとその挿絵についても、自分のイメージを書き添えた。1856年は2年前に始まったロシアとのクリミア戦争が終わり、リボンにいたキャロルは3月31日に、リボン大聖堂の鐘が戦争終結を祝って殆ど一日中鳴り続けるのを聞いている。その10日後、雑誌トレインに「バラの道」という詩を送った。この詩の挿絵について、彼は次のように書き添えた。

「その人は窓の傍に立つ。一日の終わりの陽が差し込み、窓の反対側は、次第にせまる夕闇を透かして室内が見える」

注文どうりの挿絵をつけて、翌月に第5号の『トレイン』に掲載された。

詩の中にも、日記にも特に名前はでておらず、ただ‘the Lady’とだけ  
いっている。ウエイクリング版の日記に付いた詳しい註釈でも、この‘the  
Lady’が誰ということは出ていない。古いグリーン版の方には、ナイ  
チンゲールの名前が見える。フローレンス・ナイチンゲールが、夕暮れ  
の窓辺で幻を見て召命を受けた様子を歌った詩である。

キャロルは1月1日に『アート・ジャーナル』誌の中に出ていたラス  
キンに関する酷評を読んだ。それは、「もしラスキンが絵画について十分  
に知っているなら、将来見込みのある若い画家について語って見ればよ  
い。が、彼にそこまでは望むべくもない。」とあり、さらに「(ラスキン  
は) 横柄で、無知」ともあった。これを見てキャロルは「ラスキンに対  
する酷いことば」と日記に書く。初対面の時のラスキンの冴えない風貌  
にがっかりするキャロルだが、絵に関しては彼の忠告を受け入れている。

5月31日にキャロルはクライスト・チャーチのゴードイで、リチャー  
ド・ハクルートに関するスピーチを読み上げた。ゴードイは、オクスフ  
ォードの各学寮で催される記念晩餐会で、現在では卒業生も招待を受け  
る。ラテン語の‘gaudere’ (喜ぶ) に由来するゴードイはエリザベス1世  
の時代にリンカン・カレッジで新入生歓迎のデイナーを指していた。17  
世紀になって、これが他の学寮に広まり、一般に記念の晩餐を指して使  
用されるようになった。クライスト・チャーチでは、ゴードイの席で学  
寮出身の著名人をテーマにスピーチをすることになっている。その役に  
当たることは名誉であり、準備には時間がかかる。キャロルは3週間程  
前の5月6日、学寮長リデルに呼ばれた。その日の日記は、

‘The Dean sent for me to tell me he wishes me to read out the  
“Life” at the Gaudy this time. He chose “Richard Hakluyt,” author  
of a book of travels’ と記している。初めの短い文の中に‘me’が3度出  
てくるのは、正確だがぎごちなく、あるいは名誉なことに指名された誇



り、興奮がこのような文になったのか。

テーマはすでにリデルが決めていた。リチャード・ハクルートは16世紀後半の地理学者で航海史家。航海に関する著述がある。キャロルのゴーデイのスピーチは5月31日だった。6月4日には大学の創立記念行事があり、8日から夏の休暇が始まった。1856年は、11月1日に2回目のゴーデイが催され、キャロルのダーズバリ以来の親しい友、トマス・ヴィア・ベインがクライスト・チャーチの昔の学寮長ジョン・フェルについてスピーチをした。この時はフェル奨学生に選ばれた学生のための晩餐会だった。ベインはキャロルより三つ年上の、クライスト・チャーチでは先輩にあたる。常に身だしなみを整え、正装していた。長く親しい友として、ベインはキャロルの遺言状の証人になっている。

1856年は最初のペンネーム B.B. に代えて、故郷ダーズバリからとった初めの5文字で Dares を考え出した。ところが編集者のエドマンド・イエイツが、どうも新聞記者の筆名のような、と賛成しなかったために、最終的にはルイス・キャロルに落ち着いた。この時、彼は4つの候補を上げてイエイツに相談するが、候補の中の 'Edgar Cuthwellis' と 'Edgar U. C. Westhill' について、Made by transposition out of "Charles Lutwidge" (文字の組み替えによって作った) と説明している。彼はアナグラムとは言っていないが、アナグラムということば自体は、16世紀の終わりころから既にあるので、名前の文字の組み替えということは別に目新しいことではなかった。三番目の候補は、ルイス・キャロルで、日記には、次のようになっている。

Louis Carroll (derived from Lutwidge = Ludovic = Louis, and Charles), Lewis Carroll (ditto). ルイスについては、一旦ラテン語名 Ludovic になおして、そこから Louis を得て、Lewis を作った。チャールズについては、そのまま何も言っていない。伝記の中でいわれている Charles = Carolus は、キャロル本人が言い出したことではなく、

甥のステュアート・ドジスン・コリングウッドが1989年に出した、『ルイス・キャロルの生涯と手紙』の中で言い出したことだった。コリングウッドから引用すると、

The first two were formed from the letters of his two Christian names, Charles Lutwidge; the others are merely variant forms of those names——Lewis = Ludovicus = Lutwidge; Carroll = Carolus = Charles. (*The Life and Letters of Lewis Carroll*, S.D.Collingwood p.67)

コリングウッドのこの伝記は、多くの人々がキャロル伝の原点とみなしているものであるが、キャロル自身の説明は日記の中にあるとうりルイスについて、説明しただけである。

3月1日に筆名ルイス・キャロルが決まった。そのことは、2月11日の追加事項として、向かい側の左頁に書き入れている。以後、常にこのペンネームで通したわけではなく、1860-63年の『カレッジ・ライムズ』には、B.B., R.W.G. も使用した。B.B. が何の省略か、エドワード・ウエイクリングはキャロルの幼い時の手紙を引用しそこにでてくる乳母の名前‘Bun’から、Bun’s Baby の略ではないか、と推測するが、ほんとうのところはわかっていない。R.W.G. については、キャロルの本名の第4文字目 CHARLES LUTWIDGE DODGSON からきていることを、ウエイクリングは指摘している。

<註>

- 1) キャロルはヴィクトリア朝のポートレート写真家でもあります。キャロルが撮影した写真で現在残っているものは、763件

の所在が確認されている。

- 2) 『オクスフォードのルイス・キャロル』(オクスフォード、1995年8月5日)。
- 3) 実際は2番目の妻が書いた。

〈参照図書〉

- Cohen, Morton N., ed. *The Letters of Lewis Carroll* vol. I, II, Macmillan, 1979.
- Green, Roger Lancelyn, ed., *Diaries of Lewis Carroll* vol. I, II, Greenwood Reprinting, 1971.
- Guiliano, Edward, ed. *Lewis Carroll Observed*, Clarkson N, Potter, 1976.
- Terry, Ellen, *The Story of My Life, Recollections and Reflections*, The McClure, 1908.
- Wakeling, Edward, ed, *Lewis Carroll's Diaries* vol.1, Lewis Carroll Society, 1993.
- Wakeling, Edward, ed, *Lewis Carroll's Diaries* vol.2, Lewis Carroll Society, 1994.